

シリーズ隠れた建築紹介 ～ 忠霊塔雑感 ～

フィールドワークを主体にした北陸地方の近代建築を研究テーマのひとつにしている関係上、さまざまな地域へ出掛けることが多く、時々片田舎の道端に巨石を積み重ねた造形物に出くわすこともあった。その珍妙な形態と大きさからと、本能なのか、どうも気になる存在でもあったことは確かだ。いつか本格的に調べてみたいと考えていた代物があった。その代物とは、各地域から戦争に赴き、亡くなられた方々を祀った忠霊塔または忠魂碑と呼ばれているものである。

そうこうしているうちに今年の夏、ふとしたきっかけで戦没者の慰霊祭の式典に参列する機会を得たので、こんなものちょっと調べれば、その実態などすぐに判るだろうと軽い気持ちで調べ始めてのである。

しかし、この思惑はみごとにはずれ、石川県内だけで240基余りもあることが判り、その数と種類の多さにと戸惑っているところである。そうしたなかで、デザイン的な面と興味深い事柄があった。大半の忠魂碑は自然石を積み重ねた形態のものは、建設当時の造園師が設計し、地元の人々の奉仕作業で築き上げられているが、昭和14年以降に建設された忠霊塔のなかに、モダニズムの影響を受けたようなデザインのものがあったことである。当時政府機関に準じた組織・大日本忠霊顕彰会なるものの主催で忠霊塔のコンペが行われ、審査員には日本趣味を推し進めていた伊東忠太、内田祥三、佐藤功一など相当たるメンバーが加わっていた。だが、前川国男、吉田鉄郎、堀口捨己等々の若きモダニトたちは果敢に挑戦したのである。結果的には彼らの応募案は見事に落選するが、のちに全国各地に建設される際に、僅かであるが彼らのコンセプトを取り入れた忠霊塔が存在することは、日本近代建築史上、忘れてはならない事実であろう。

—支部建築活動審査部会委員・金沢工業大学・中森勉



石川県忠魂塔 昭和16年建立

北陸支部インフォメーション

■北陸支部創立50周年を迎えて

日本建築学会は、明治19年の創立以来、既に111年を経過しており、昭和61年の北海道大会において創立100周年を盛大に祝ったことは皆様ご承知の通りです。しかし、学会創設当初より支部の体制ができていた訳ではなく、最も早い東海支部の設立が昭和6年というように、かなり遅れてから必要に応じて設立されてきたというのが実情で、昭和24年の四国支部の設立をもって現在の全国9支部体制が確立されました。

このようにして設立された各支部も既に50年に近い年月を経過し、この11月末には近畿支部の創立50周年記念式典が挙行されました。わが北陸支部も明るく平成10年3月27日をもって、昭和23年の創立以来丸50年を経過することとなります。そこで、昨年来、北陸支部創立50周年の記念事業をどうするかということについて、

支部役員会および事業委員会等で種々議論が重ねられ、その結果、50年誌の発行と記念式典、記念講演会を支部大会に併せて開催することが決まりました。現在各支所の持ち回りで開催している支部大会は、明年は石川支所の担当となりますので、奇しくも昭和23年に設立の発会式が行われた金沢の地で50周年記念事業が開催されることとなります。

現在、これらの行事を行うための実働部隊として「50周年記念事業のための実行委員会」が組織され、更に、その中に上記三つの事業（50年誌、記念式典、記念講演会）に対応したワーキンググループを設けて、各事業の具体的な内容について企画・検討を行っているところです。会員の皆様からも、建設的なアイデアをお寄せ頂ければありがたく存じます。詳細については未定ですが、現在のところ、平成10年7月24日（金）に記念行事を、また、7月25日（土）に支部大会を行う予定で準備を進めておりますので、わが支部の創立50周年を盛大に祝うためにも、会員の皆様のご参加をお願い致します。

—50周年記念事業のための実行委員会委員長・高山 誠

■講演会報告「構造と建築のあいだに」（富山支所）

建築学会富山支所では、学会員に加えて県民をも対象とした知的サービスの一環として毎年、見学会や講演会などを企画している。今年は、講師に建築構造の大家木村俊彦先生を迎え「建築と構造のあいだに」と題した講演会を8月30日（土）15時から17時30分、富山県民会館会議室にて行った。建築について一流どころの話が聞けるとあって実務者や一般市民ら160人も参加者があった。講演では、先生がこれまで手掛けられてきた作品がスライドで紹介され、「構造と意匠は二元論ではなく一体として考えるべき」との持論のもと、タイアップした意匠家とのやりとりが



熱っぽく語られた。特に先生は「私と組めば一流の良い建築ができる」とか、「構造主導型で進めると意匠家は第一印象でぐいぐいと構想を練り上げられるので良い建築ができる」とも。会場には「ウーン、なるほど」といった感嘆が走り回り、また先生の自由奔放な語りから、飾り気の無いきさくな人柄にも聴衆大いに魅せられていた。そして講演会は盛大に終わった。

—富山美術工芸専門学校教員・富樫 豊

■支部事務所移転のお知らせ

北陸支部はこの10月より、独立した事務所に移転致しました。パソコンも設置され、少し事務所らしく落ち着いたところです。今後は、より積極的に活動していきたいと思っております。会員の方々、お近くにお越しの時には、ぜひ！ お立ち寄り下さい。—支部事務局・瀬口さゆり



日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第12号

発行日 1997年12月20日発行
 発行 日本建築学会北陸支部広報部会
 光高 啓二（新潟） 加藤 則子（富山）
 船戸 慶輔（石川） 後藤 正美（石川）
 桜井 康宏（福井） 土本 俊和（長野）
 事務局 室田 文男・瀬口さゆり
 〒920 金沢市玉川町15-1
 TEL&FAX 076-220-5566

特集

自然・環境との共生



支部ニュース「AH!」の第12号をお届けいたします。本誌としては始めて予定を上回る早さで発行できたことについて、執筆いただいた皆さんと新しい広報部会員の皆さんに心より御礼申し上げます。

さて、前号から始まったシリーズ「共生」の第2段として今回は、富山という地域に根ざした生活と住まいづくりに情熱を傾けておられる皆さんに「自然・環境との共生」への熱い思いを語っていただきました。いずれも日々の実践に裏づけられたものだけに極めて説得力があり、「技術」とか「文明」という非常に大きなテーマを身近な問題として分かりやすくお教えいただいたように思います。また、まさにここで議論された「自然との共生」ということをキーワードとして「人々の共生（人間同士の共生）」にも新たな活路が見い出せるのではないかと……ということをお教えいただいたようにも思います。

自然・環境との共生

環境問題、自然破壊、などの言葉が毎日どこかで叫ばれているこの頃です。住宅の設計に細やかな配慮をする設計者と地学を専門とする施主、八尾伝統大工の棟梁、自然愛好行政マン……様々な切り口から見る富山の自然とのつきあい方を仕事や生活の周辺の身近なところから聞かせていただきました。(広報部)

自然とつきあう

小林：56豪雪のとき、除雪作業や落雪の下敷きで20数名が亡くなりました。それがきっかけで、雪に強い住宅づくりに取り組んだとき、アンケート調査の回答に、「雪下ろしは、楽しみでもある。」というのがありました。もちろん除雪は大きな負担であるけれども雪下ろしは雪のある文化を体感する貴重な機会でもあるんです。

島崎：自分が建てた家へ雪下ろしの手伝いによく行きます。高齢者だけの家はまだしも、今は若い人がいる家でも頼んでくるんですよ。経験がないと恐ろしい仕事です。単に木登りで高いところに慣れているのと雪下ろしのために雪の積もった屋根に登るのとでは全く違いますから。

小林：瓦を痛めないように雪を30センチは残して落とすとか、軒がおれないように軒先の雪を切るとか、ちゃんと家を守ってきました。雪の力を知らないで、自然の脅威を知らないで、その地で暮らしていいのか、はたしてそれで幸せなのかと思ひ悩みますね。

國香：洪水なんかもそうですよね。家の近くに黒部川があるんですが、大雨が降っても川のことを気にする人は少ない。川との生のつきあいがいから川が気にならないんです。

江下：國香さんの家を設計し、現在建築中です。暖房は2台の薪ストーブなんですよ。

國香：私は地学が専門で、石油の多用をなるべく避けて家づくりをしたいし生活もしたいと思い、江下さんといろいろ相談しながら家づくりを進めています。今春から家族全員で薪ストーブ用の流木拾いを始めました。



大きな木の下で

島崎：昔は取り合いになったものですが……。流木は油が抜けてよく燃えてくれる。

國香：今は誰も拾わずじゃまもの扱いです。下流に流れて漁網を破るとか見苦しいとか。集め始めてみると、川遊びにもなり子供達も楽しんでます。川をよくみるようにもなりました。苦労して集めた薪ですから「無駄にせんとこ、もったいない。」と言っています。

小林：もったいないという言葉、今はなかなか聞かなくなりました。いい言葉なのに。いろんな面で過剰です。暖房も必要以上にやりすぎています。

國香：日本で石油はとれないのに、計算すると日本人は1人1日11リットルの石油を使っていることになります。このような状態が永續するはずがない。日本人は日本の地を知って世界に負担をかけないように生活していかないとはいけません。

小林：私は家では自分の必要最小限の暖房に止めるよう努力しています。石油を多量に使っている以上せめて不必要なエネルギーを使わないようにする義務があります。子孫に対する義務。

島崎：木でもその地に育った木を使っているうちは、木を切って植えて育ててという過程を身近に見て実感し森林資源のことも把握できるが、今はそうじゃない。この数十年の資源の食いつぶしは異常だ。石油も木も外国のものを使っているから感覚が麻痺している。

國香：最近八尾町(富山県西南部)の人も黒部川(富山県東北部)に流木を拾いにくるとか。黒部の人もちゃん



座談風景



富山県営総課
小林 英俊さん



富山県総合教育センター地学と環境担当
國香 正稔さん



座談風景

と黒部の自然の恵みを得なくては！(笑)この夏の暑い盛りにもうちの家族はせっせと流木を拾い集めましたよ。

小林：人類が登場して200万年。200年前の世界人口は9億人。100年前には14.5億人だったのが西暦2000年には63億人になるという。この100年間で48.5億人の増加です。しかもわずかの25年で20億人が増えたそうです。そして100馬力もの車を乗り回している。馬を100頭だてで移動しているんだからすごいよねえ。(笑)

國香：1馬力が10人力とすると1000人の大名行列だ。

伝統の技と素材への挑戦

江下：國香さんの家の設計ではいろいろな問題にぶつかり考えさせられました。人にやさしい自然の素材にこだわり、石油製品を省こうとしても高価で手に入りにくかったり、仕事をする上でまたメンテナンスの面で大工さんの反対にあったり、法律に引っかかりそうだったり。でも國香さんが「自分の思いを実現させるために、よその土地へ行ってその地の自然を壊してまで建てたくはない、今住んでいるこの土地をよりよい環境のもとで守っていきたい」と言われて、私も國香さんの夢の実現にできる限り協力する決心をしました。

小林：島崎さんは八尾町の大工棟梁として、金物を省くのを認めてもらうことなど大変な苦労がありましたよね。今ではそれが八尾の町並みの再生へとつながっています。昔からの技術には意味がありますよね。

島崎：これでも一時若い頃、25年くらい前に新しい方向へ走ったことがあったんです。でも今に残っているものの技を見ると、何百年もの経験や伝統はすごいです。残ってきたものは貴重です。曲がった木、まっすぐの木、木の都合を見極めてつくる。自然をねじ伏せるのではなくて自然の都合を知ることが肝心。そういう意味で伝統の技を生かしながら今できる新しいことも考えていますよ。

小林：そういえばこの島崎棟梁の事務所(古い民家の移



江下建築設計事務所主宰
江下早百合さん



島崎工務店・八尾大工棟梁
島崎 英雄さん

築再生で八尾の伝統的スタイルでつくられている)の床が床暖房ほどじゃないけど温もりが感じられますけど……

島崎：これは床板の下に60ミリの厚さで、石膏をいれているからです。真冬でも靴下一枚分の暖かさを感じ



壁土に石膏を混ぜる



石膏入りの土壁を塗る

ますよ。土壁にも石膏を断熱材として使う実験中です。自然素材で通気性を持たせながらの断熱効果も研究中です。それに石膏はただで手に入ります。自分たちで考えて一つ一つ確かめながらやっていくことが大切だと思っています。

小林：たとえ欠点が出て失敗の繰り返しでも、そういうことはやり続けていってほしいですね。

仕事の中で

江下：國香邸では内装、木部造作材、床板、建具や家具にも塗装をしないでやっていますが、この棟梁の事務所の床の自然な風合いは何ですか？

島崎：クルミの板で人間



島崎工務店内部
くるみ材の床板はエゴマ油のつや



國香邸外観



塗装をかけないで



キッチンにも塗装なし

が食べられるエゴマの油と白ろうを煮て塗っています。良く浸透して落ち着いた色になってきました。ノウハウは教えますから皆さんもやってみてくださいよ。この床も時々手入れをして楽しんでます。最近の住まいは時間とお金に追われてやっている。住む側も作る大工も楽しむ色気がないねえ。

國香：先日現場を見に行ったら、しばらくの間に柱が日焼けしているんです。あー太陽の力だなあって愛着を感じています。

江下：そういう施主さんばかりだと設計もやりがいがあります。(笑)その自然の変化を楽しむかどうかの価値観の違いは大きいですね。今一緒に仕事している職人さんとも相談しながらやっていますが、やっていくうちに最初は無理だと思われていたことも可能だということが次第にわかってきました。職人さんも私もいい仕事ができたと自信ができました。

小林：施主と設計者と職人さんとのいい出会いでしたね。相乗効果というか、お互いが感化されて作り上げているんですね。

江下：皆が勉強しながら戦っています。(笑)この頃は人や社会も特に環境問題に関心を持っていますよね。大変な問題ですが、何か解決方法はある、どこかに希望は持てると思っていて良い方向に前向きに努力したいと思います。

小林：私達は自然をどれだけ知っているのか。知らない人間が環境アセスメントをやっていくと非常に危険だと思います。とにかく自然理解が浅薄です。自然に対して強力で求めすぎると良くないです。何事も節度を見極めるのが大切で、それが難しい。

江下：今までもすでに犯してきた環境に良くなかったもの後始末を考えていくべきです。やってしまった事の

責任をとるといふか……。後始末といってもそれらを壊してまた新たにというのではなくて、転用や活用をしていかなければ、かつて木造のすばらしい建物を壊してコンクリートの建物に替えてきたのと同じ事になってしまうから。今あるものをゴミにするのではなく、プラスチックでつくられたものでも活かすという精神で。

島崎：私は自分で丸太を刻み、そのための道具も使えて家の仕組みもわかってやってきているつもりですから、木造であれば壊すのも再利用して使い回すのも自由自在です。昔からの工法を生かし、富山職芸学院では早大と共同で木造の「完全リサイクル住宅」の開発を行う予定です。

國香：家を建てることになって自分自身の生き方を問い詰められることになりましたね。自然とのつきあい方、関わり方をずいぶん考えさせられました。私だけではなく家族共々。ぜひ見に来てください。

小林：今日は島崎棟梁の仕事をいくつか見せてもらいながらの座談会でしたが、國香邸が完成したらみんなできましよう。楽しみにしています。

環境・自然との共生というあまりにも広くて深いテーマで漠然とスタートした座談会でしたが、まずは身近な自然の中に自分の身を置き自然を知る、地球の中の自分の位置を知ろうということと、大上段に構えなくとも自分にできることから考えて実行していこうということに話は落ち着いたようです。國香邸での再会と、またの建築談義を約束してお開きとなりました。

(広報部・加藤則子)

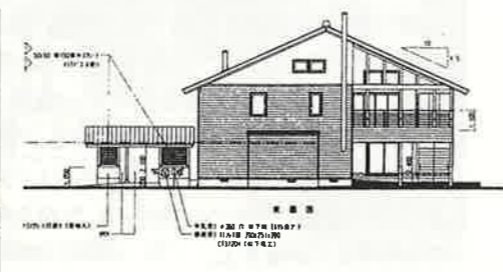
—1997年11月11日、月夜の晩、八尾にて収録—



島崎工務店内部



島崎工務店内部 天井を見上げる



國香邸 図面

桜町遺跡を観る

先日、小矢部の桜町遺跡を見学してきた。国道8号線のすぐ脇にあり、大勢の見物人の目を誘っていた。縄文中期の木造建築物が出土したとニュースで聞き、当時の遺物と言えば、石器・土器のたぐいで木造建築物が出土した例はなく、堅穴式家屋を想像していた。発掘調査地は1600㎡で南北幅20mの東西に細長く鋼矢板で囲まれた区域で周囲の地盤より1~2mほど掘り進んでいた。

当遺跡は昭和61年の試掘調査、昭和63年発掘調査、そして今回の発掘調査と10年続いている事になるが、調査予定面積の10分の1程だと言う事だ。この遺跡からは1万2000年前の縄文草創期から2300年前の縄文晩期までの縄文時代全期間の遺物が出土しているようで、今回の調査で注目されるものは「床の高さが地上から2mもある大型高床建物の柱」、「床の高さが地上から1m程度の小規模建物の柱」、「横に渡した細い棒にヒノキのうすい板を編み通した高床建物の壁材」、「ほぞ穴が2カ所ある横架材」、「渡脛仕口がほどこされた木材」等である。

今回出土した柱材によって縄文時代に高床建物が存在したことがより確かなものとなり、柱材以外の建築材の発見により高床建物の細かな構造が分かるようになった。特に渡脛仕口は弥生時代や古墳時代の遺物からも見つからない高度な木工技術で、今回見つかったものは日本最古の物と言う事になる。

弥生時代に米作りの技術とともに日本に伝えられたと考えられた建物がそれより2000年も古い縄文時代にすでにあった事が桜町遺跡の発掘で証明されたと言う事はなんとロマンのある事ではないか。私達はこの歴史を変える事実をもっと深く探求しなくてはならないのではないだろうか。

一鹿島建設(株)北陸支店富山営業所・三鍋幸夫



動物との生活で思う事

明け方、肌寒さに睡眠を奪われふと目覚めた私の耳に、朝を報せる雄鶏の声、枕元に手を伸ばし時計を見ると四時過ぎ。動物達の一日の始まりです。

我家は大家族です。人間は、主人と私と二人の子供だけなのですが、犬一匹、猫三匹、鶏十羽、兎が十五羽、それに亀が二匹、そうそう、守宮(ヤシ)のリザードを忘れていました。まあ、そんな訳で何やかやと天手古舞の一日です。散歩、餌やり、小屋の掃除に糞の始末、一日があっという間です。

子供達を学校へ送り出した後、主人と二人で、まずは犬の散歩。その道すがら季節の移り変わりに目を奪われ話がはずみます。先日、ツバメが空一面に集まり小さな声をたてながら乱舞しているのに遭遇しました。ツバメのあの様な集団をかつて見たことがありません。空は澄み渡る様な青空、すっきりとした秋晴れを期待できそうな朝の事でした。そして、その日以来、ツバメの姿を見かける事はありませんでした。ツバメは南の国へ帰ったのです。その旅立ちの朝、ツバメはあたかも子供達の遠足の前のように、一カ所に集まり、点呼をとるかの様に、声かけをしていたという訳なのです。私も主人も、その様な自然の中の一コマを知らずに生きてきたのです。何かすてきな夢をみた朝のようにとても幸せな気分が一日が過ぎていきました。

鶏小屋には、一日分の卵が生んであります。それは、そこのスーパーで求めるものと違い、殻が厚く黄味と白味もぷっくりとしていて、なつかしい昔の玉子の味がします。野菜の皮やヘタ、傷んだものは全て、鶏や兎が食べてくれます。料理の残飯は全て犬や猫が食べてくれます。そんな訳で、我家の生活からでるゴミは大変少ないのです。また、動物達の糞は、春先から始める家庭菜園にはなくてはならない大切な肥料となります。我家の生活は、動物達によってずいぶん助けられているという訳です。動物達は、餌や世話、愛情をもらいます。私達は、彼等から新鮮な玉子や貴重な経験、無駄にしない心、そして心のやすらぎをもらいます。動物達と私達は家族です。



それぞれの立場一人らしく、犬らしく、猫らしく、鶏らしく、亀らしく、守宮らしくを尊重し合って共同生活をしている家族です。近頃、人間ばい動物が増え動物を人の様に扱う人々が増えてきます。しかし、やはり、らしさが一番幸せにつながると思うのです。人にとっても動物にとっても。ですから、我家は、これからもずっとこのポリシーを守り続けていくことでしよう。

さて、今日は、いくつ玉子があるかな。そして、どんな新しい発見に出会えるかな。そんなワクワクした気分が、私の一日が今始まります。

—金沢市 主婦・三上里花

たまごっち



だっこちゃん：1960年代に大流行したビニール製の黒人をイメージした人形。当時、1個180円、今で言う女子高生世代が懐からませずいていけるのをでゴミにも取り上げられ、大流行。黒人(子供のようである。)をイメージしたという外観と腕にからめる使用法から愛着を持って撫でることができたと考えられる。デパートでは整理券が発行したほど。240万個を売りつくした。

たまごっち：1990年代に大流行した卵形玩具。1個2000円くらい。カラフルな色使いと手軽さ、育成形態の種別から「携帯用デジタルペット」と呼ばれ、女子高生を中心に大流行。しつけ、食事等、育成していくのに、画面上のペットに対して非常に愛着が湧いてくるものようである。各店舗で整理券が発行されるほどの人気。現在においても手に入りにくい。「たまごっち2」も発売。

いつの時代にも……

変わらぬ良さがある……

障害者のパン工房

ハスの実の家は、昭和40年、障害児をもつ青木夫妻を中心に「どんなに重い障害を持っていても人間らしく生きる場を！」という願いを込めてつくられた施設です。福井市での長い無認可の時代を経て、昭和63年に入所更生施設として芦原町に移転し、社会とのつながりや自立への要求を育てながら労働活動にいそしんでいます。

開設3年目に、アレルギーの子供をかかえる会から「ひえクッキー」を作ってもらえないかとの依頼があり、食品加工班が生まれ、天然酵母パンなどのレパートリーを増やしてきました。平成5年より、安心して食べられるパン屋さんが欲しいという応援の人達も加わって、「町の中にパン工房を！」と建設準備を進めてきました。同時に、入所施設を利用する仲間たちも24時間施設で暮らすのではなく、パン工房に通い、地域の人とふれあって生きていくことを目指しました。

その後、日本自転車振興会からの助成や県の許可もいただき、民間から借りた事務所の改修工事に着手し、この9月に通所更生分場としてオープンしました。後援会である「ハスの実の家」が中心となって開催した3回のワークショップで寄せられた意見を反映して、夢あふれるお店になりました。工事費用もこうした大勢の市民の募金やバザー等の収益によってまかなわれました。

天然酵母は成熟に時間がかかりますが、それだけに小麦粉の味わいを生かした深いコクと素朴な風を引き出します。国産小麦粉を主材料に、天然塩、三温糖、有機栽培のくるみ、レーズン、それにハスの実の家で収穫された無農薬野菜を使った手作りパン。地域の中にとけ込み、コミュニケーションや文化をつくり、情報を発信したり収集したり……、くつろぎの場、ふれあいの場として、オープン以来閉店時間の6時前には売り切れのうれしい毎日です。

—ハスの実の家・渡辺登美子



使う側と作る側のギャップを浮き彫りにした 女性建築士達がまとめた報告書



最近の女性パワーには目を覚ますものがあると、同性として常々誇らしくも思っていたところ、我が長野県においても、パワーと情熱と実行力溢れる女性達がいることを知った。「高齢者のためのやさしい建築」という報告書をまとめた(社)長野県建築士会長水支部女性建築士委員会の女性委員

の面々。

2年前に発足した女性委員会が最初に取り組んだテーマ「高齢者介護と建築」の勉強会で、設計指針や書籍は数多くあるものの実際の現場の状況はどうかとの素朴な疑問からスタートした調査だ。対象は老人福祉現場に携わる長野県介護福祉会100名、北信地域の施設9カ所。当初の予定では平成7年9月にアンケート用紙を配布して11月回収、結果を翌年発表の予定であった。が、アンケートの設問に対する回答を記述式にした事で「現場に携わる方々の生の声に接し、現場見学と緻密な聞き取り調査の必要性を感じ、平成8年4月から12月にかけて北信地域の7カ所の施設を廻った」と、この計画の中心的役割を果たした女性委員は語る。

こうした経過を経てまとめられたレポートは、平成9年4月に発表された。内容は「高齢者、勤務者にとってその施設はやさしい建築ですか？」をテーマに「高齢者施設、在宅福祉へのアンケート」「高齢者施設見学レポート」で構成され、書式回答の統計と聞き取り調査による細密な回答がデータ化されている。

女性の細やかな感性と地道な調査が、建築や介護施設に携わる人達のみならず、高齢化して行く自分達自身の環境を考える上で役立つ報告書となっている。建築士としての仕事をこなす傍ら、家事もこなし、さらにかくも重要な、しかも長期にわたる調査を手弁当で成し遂げた彼女達に心からのエールを送りたい。

なお、本報告書をご希望の方は長野県建築士会長水支部事務局(026-228-6963)へお問い合わせ下さい。
—タケムラデザイン事務所・竹村紀久子

役人' にとっての「市民参加の まちづくり」

「市民参加の『まちづくり』」「市民主体の『まちづくり』」が叫ばれて久しい。いわゆる『役人』という立場で、この「市民参加の『まちづくり』」を市民の方々に実践していただくべく、いろいろな『仕掛』を考え、挑むが、そうそう簡単に敵(?)も乗って来るものではない。(こんな事は百も承知の筈)

ある日の新聞。「我が〇〇町のルーツを知ろう」と集会が開かれるとのこと。〇〇町。これは私にとっては見過ごせない地名。



一昨年まで、都市景観をテーマに「市民参加の『まちづくり』」を私自身が仕掛けてきた『町』です。次の日曜日に過去の行きがかり上(?)、この「我が〇〇町のルーツを知ろう」との呼びかけに引き寄せられ〇〇中学へ行ってみた。休日の学校なのに車の数がかなりある。「ほうー、なかなか盛況のようだ」と思いつつ会場に入ってみた。さすがなかなかの盛況だが、ちょっとがっかり。昔若かった人がほとんどでは。さらにもう一つがっかり。まだまだ仕掛け続けているはずの、かつての同僚の姿が見えない。そして、この〇〇町に住んでいる筈の同僚の顔も見えない。「そうか、あいつらも毎日毎日仕事に追われ、残業続きで日曜日くらいは家庭サービスの日か。いやいや、今日も休日出勤かもしれないな」と自分を納得させて、昔若かった人の話に、なるほど、なるほど。

役人であると同時に、いや、その前に一市民である筈の我々が、「市民参加の『まちづくり』」を呼びつつ、実は一市民としてこの「市民参加の『まちづくり』」に参加する余裕の無い状況を、どう納得すればいいのだろうか?

どなたか、実践的なアドバイスを!
—新潟市都市整備局・相田幸一

小春日和の一日、バードウォッチングはいかが。新潟市の周辺は沢山の白鳥、雁、鴨が飛来する湖沼が多い。新潟駅から徒歩で十分の鳥屋野湯、ラサール条約に指定された佐潟、オオヒシクイの飛来地福島湖などなど、中でも水原町の瓢湖は白鳥の湖として名高い。吉川老人の「コーコーコー」と言う餌付けの声に群がり、老人の手から争って餌を貰う鳥達の姿は見られなくなったが、100円で餌を買えば誰でも餌付けが出来る。幼子が自分の投げた餌に群がる鴨の多さに驚く様はほほえましい。



今の時期はキンクロハジロ、ホシハジロ、オナガガモなど小型の鴨が多く、白鳥は数羽を数えるだけ。彼らは昼間は稲刈りの終わった田圃で数十羽づつかたまつて餌を拾っている。枯れ野に白い固まりが、あっちにこっちに見え、2、3羽警戒のためか飛び回っている。ここは天候の悪い時でも湖畔の白鳥会館から観察できるようになっている。

また、ここ水原郷は米所であり、五頭連峰の伏流水による酒蔵が数カ所ある。白鳥の名のついた銘柄もある。その中で、白龍酒造の地元産の五百万石100%使用の純米酒の辛口が口に合った。また、毎月4日、14日、24日には六斎市が立ち、昔ながらの農村を垣間見ることが出来る。近年出来た代官屋敷や、天保8年から同13年まで5年を要して造られ明治政府の越後府に使われた豪農の別邸、ロシア村などを訪ねたり、出湯温泉、村杉温泉や月岡温泉で温泉に浸るのもいい。

最も近い出湯温泉は車で数分であり、100円で入浴する事もできる。ここの温泉は胃腸に良いと、ペットボトルやポリ容器など持参する人も多い。また、五頭山の登山口として登山者も多く訪れる。新潟市から国道49号線を車で30分ほど、バスセンターから急行バスもでている。磐越高速道水原インターで降りる。JR磐越西線水原駅下車。

—横村直衛

かつてはゆったりした生活を送りかつては温もりもあふれていた
私たちは今日の新生活の都市になにかを提案したい

曾經

このまちのふうけい

あのまちのふうけい

そのまちのふうけい

どのまちのふうけい?